２００８（平成２０）年６月５日　ヒアリング資料

東京原告番号１８番浅倉美津子

明日２００８年６月６日で、私がフィブリノゲンを投与されＣ型肝炎ウイルスに感染してから、２０年になります。その時出産した次男が明日２０歳の誕生日になります。そんな記念すべき前日に話をさせて頂く機会を頂き感謝申し上げます。

１　フィブリノゲン製剤を投与されたときの状況

私は次男を出産した直後の記憶や体感を今も忘れる事ができません。次男の出産時の出血が少し多かったため、輸血はＨＩＶが怖いので、その代わりに何かを点滴しますと言われ、フィブリノゲン製剤が投与されました。氷水のような液体が私の体中の血管を瞬時に駆け回りました。途端に歯の根の合わぬ様な震えがありました。

熱がどんどん上がり、私は一体どうなってしまうんだろうと、不安で一杯になりました。暫くして次男と対面した時、本来は感動のシーンとなるはずなのに、私は自分の身体の異変に対応するので精一杯で、次男の誕生を喜ぶ余力もありませんでした。次男は、まだ見えてない眼を見開いて私に大丈夫だよ、頑張ろう、と言っているようでした。

出産の翌日以降も身体がだるく、微熱が続いたため、なかなか退院出来ませんでした。私はまだ幼い長男と、産まれたばかりの次男が気になって気が気ではなく、産後２週間ほどしたころ退院後も通院することを約束して、やっと退院を認めてもらいました。

先生を説得して退院したものの、産後の体調は酷いものでした。家事どころか夜中お腹をすかして泣き叫ぶ次男にミルクを作ってあげる体力も失くしていました。私は結局退院して１０日ほど過ぎたころ、急性肝炎を発症し、小学校１年生になったばかりの長男と年まれたばかりの次男を夫に任せ、約２か月の入院をせざるをえませんでした。当時、Ｃ型肝炎ウイルスに何故感染したのか原因は解りませんでした。だから私は３７歳で高齢出産した事、出血等で体力が落ちて感染してしまったのだろうと、私のお産の仕方が悪かったために子供たちや夫につらい思いをさせてしまったと自分を責めていました。

２　Ｃ型肝炎に奪われた私たちの夢

私は感染して十数年して慢性肝炎に進行していると診断されました。

病気を忘れようとした事もありました。ですが、私は知人の肝炎患者さんから肝炎が肝硬変や肝がんに進行する怖い病気であることを知っていたので、毎月或いは数か月毎の検査日は忘れずに欠かさず受診しました。子供達はまだ小さかったけれど、お母さんは疲れたと言ってはよく横になっていると言う印象だったようです。

私の夫は演劇家で、私は夫の演劇にのめり込む姿に共感し、共に人生を歩んでいこうと

決意して結婚しました。夫の演劇活動では十分な収入とならないため、私が働いて家庭の収入を得て、夫には好きなだけ演劇活動に励んでもらおうと思っていました。共に白髪の生えるまで‥　それが私の生きがいでした。

でも私は肝炎ウイルスに感染してしまいました。私は十分に働くことができなくなり、夫を支えるどころか、生活のため夫に演劇をやめてほしいとまで言わざるを得ませんでした。その後、夫とは事実上別居生活となりました。

５年前私の肝炎ウイルスが再び暴れだして入院した時、夫は見舞いにもきませんでした。それから間もなく私はちっぽけな愛情をあきらめる決意をしました。私達は離婚をしました。

Ｃ型肝炎ウイルスは私のささやかな幸せを奪いました。先ほどお話しした私の知人の肝炎患者さんは、肝がんで亡くなってしまいました。彼女は女優で、亡くなる直前まで仕事に復帰したいと願っていたのに、その夢を奪いました。東京原告１３番さんは私は生きたいと訴えながら亡くなってしまいました。

3　インターフェロン治療について

私は４月からインターフェロン治療を受けています。副作用は個人差がある事を知り、あまり心配し過ぎてもよくないと自分に言い聞かせ、何よりやっとこの治療に入れる喜びのほうが大きく治療に臨みました。

４月１０日に第一回目のインターフェロン投与があり、その後５～６時間してから３７度台の熱が上がりだしました。２３時くらいにはインフルエンザ様の症状、悪寒、節々の痛み、３９度まで熱は上がり続けました。朝になると熱は下がりますが、今日まで８週続けて、微熱は続き丸一日平熱で過ごせた事は一度もありません。２０年間私の肝臓に棲み続けたウイルスを排除することは、容易ではないのです。

私の場合副作用の中で一番強いのは、だるさです。このだるさが体力気力を奪い、殆ど寝たきり状態で暮らしています。食欲もありませんので、体重も一同目の投与から２か月で約４キロ落ちました。

急性肝炎を発症した時の症状とよくにているなと思っています。でもあの頃は息子たちが幼かった。だから早く病院から出て元気になってあげなければいけないと思っていました。でも今は、自分を奮い立たせる気力もなく、何をする気にもなれず、だるい重たい体を持て余しています。

家事は一切長男に任せ、長男が仕事の帰りがけ、何が食べたいか？欲しいものがあるか？毎回聞いてくるので、お願いしてしまっています。

私はこれまでずっとパートの仕事をしていました。理解のある職場で、私の薬害肝炎訴訟の活動にも理解を示してくれていました。本当は、最初の入院治療のあとは、仕事に復帰したかったのですが、こんな状態がいつまで続くか分からず、しばらくは治療に専念

するしかないので仕事を辞めてしまいました。

４　検証委員の方々にお願いしたいこと

私達Ｃ型薬害肝炎被害者は、たった一本の血液製剤のせいで長い闘病を余儀なくされました。１９７７年にアメリカのＦＤＡが承認を取り消した時、１９８７年に青森の三沢で集団感染が報道された時などは、承認を取り消すきっかけをなりえたはずです。それなのに、この二つの大きな事件後も、この製剤は作られ続け、承認され続けてきました。

そして１９８８年６月６日私の血管にもこの悪意に満ちた製剤は投与されました。当時私は勇気がなく、医師に感染原因を聞くこともできませんでした。でも当時の資料を精査し、当時の関係者に正直に事情を話していただく事が大切だとおもいます。委員の皆様、厚労省の皆様、２０年も経ってどうしてこの製剤が蔓延したのか、私の肝臓に棲み続ける事になったのか？真相を追及するのは大変なご努力が必要だと思います。ですが、どうかそれをやり遂げてください。そしてその結果を今後薬害が再び起こらないための再発防止策に活かしてください。薬害が再び繰り返されるようなことがあれば、私たちの被害が何ら教訓として活かされることがなく終わるのであれば、亡くなった原告さん達、これからもまだまだ生きて闘病を続けなければならない私たち被害者は、全く報われません。

もし私が亡くなったとしても、私の息子たちには、きちんと報告できるようにしてください。委員の皆様、厚労省の皆様、重ねてお願いいたします。